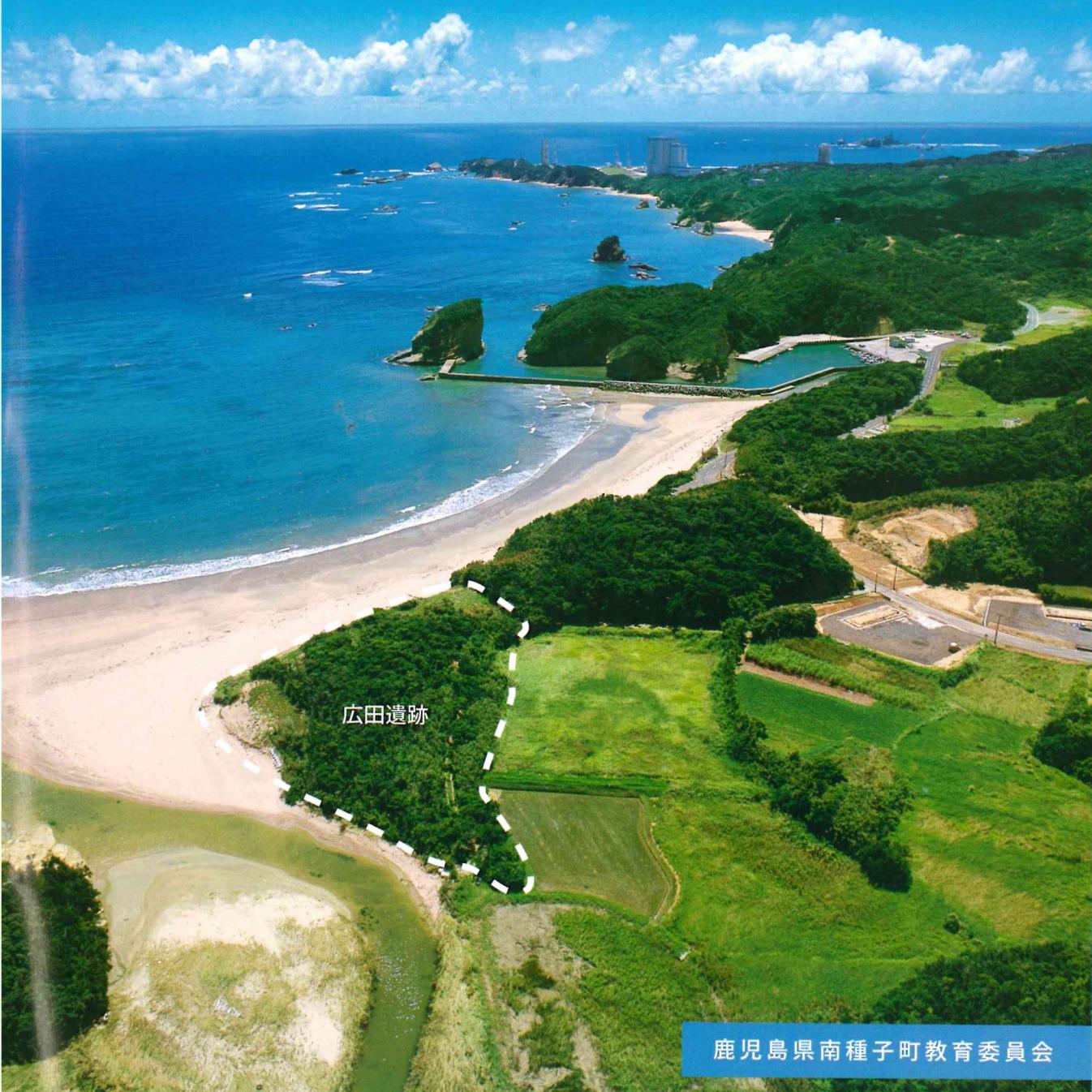


国史跡

広田遺跡

HIROTA SITE
ガイドブック



砂丘に眠る美しく装った人々

今から1700年前、種子島の広田に、絡み合う帯状の文様を彫刻した美しい貝製の装身具(アクセサリー)で身を飾る人々がいました。

彼らは、1957-1959年に広田砂丘から掘り起こされ、研究者によって、「広田人」と呼ばされました。

2006年6月8日、彼らが身につけていた多彩な貝製装身具は、国の重要文化財に指定されました。

また、2008年3月28日には、彼らの墓地である「広田遺跡」が、国の史跡に指定されました。

このように二つの国指定を受けた遺跡は、鹿児島県では、広田遺跡と上野原遺跡の2遺跡だけです。



広田遺跡の位置

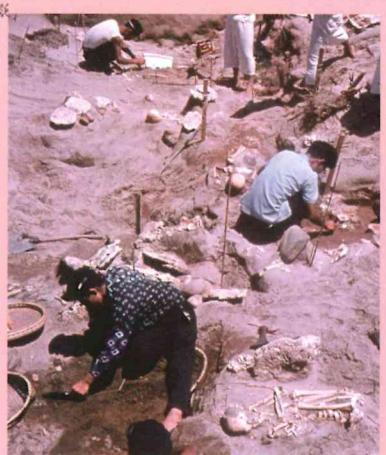


種子島は、亜熱帯性自然の北縁にあたり、黒潮が近くを流れています。

広田遺跡は、種子島の南部、東海岸に面した全長約100メートルの砂丘にある墓地遺跡です。

1955年、台風22号の波浪により、この砂丘の一部が崩壊した際に、地元の長田茂・坂口喜成・齊藤貞夫によって発見されました。

広田遺跡の発掘調査

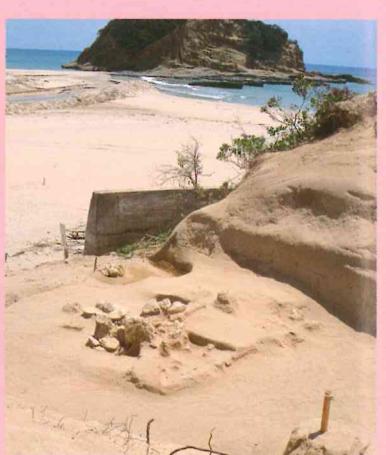


発掘調査は、1957-1959年にかけて、盛園尚孝・国分直一・金関丈夫氏らによって行われ、多くの地元の青年が調査に参加しました。

調査の結果、広田砂丘の南端から、90箇所の埋葬遺構、157体の人骨、44,000点以上の貝製装身具が出土し、この遺跡が、3世紀から7世紀ごろまでの集団墓地であることがわかりました。

この墓地では、墓標として地面の上にサンゴ石などを並べる「覆石墓」と呼ばれるお墓が多数みつかりました。

南種子町教育委員会による調査

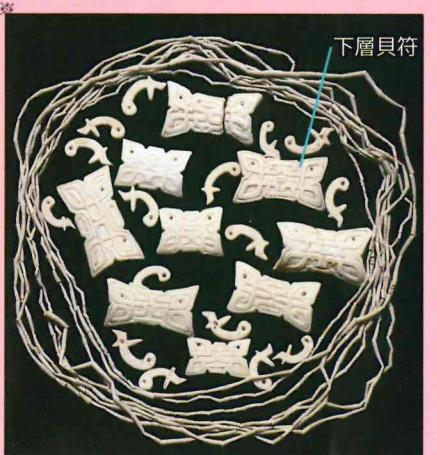


2005-2006年度には、南種子町教育委員会が、広田遺跡の範囲と内容を確認するために発掘調査を行いました。

調査の結果、広田砂丘の北端にも、当時の集団墓地があることがわかりました。

この墓地では、墓標として地面の上にサンゴ石などを並べる「覆石墓」と呼ばれるお墓が多数みつかりました。

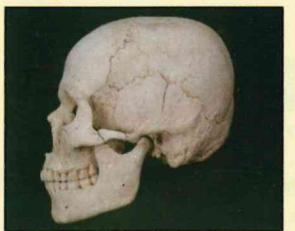
広田人が身につけていた貝製装身具



出土した貝製装身具の中には、この遺跡でしか発見されていない独特のものがあります。また、これほど多彩で多量の貝製装身具が出土した遺跡は、日本列島では他にありません。

研究者の中には、下層貝符に刻まれた絡み合う帯状の文様が、古代中国の文様に似ていることなどから、広田の文化は、中国大陆の影響を強く受けていると考える人もいます。

広田人は絶壁頭



出土した人骨は、ほぼすべての後頭部が扁平(いわゆる絶壁頭)でしたので、頭がい骨を変形させる習慣をもっていた可能性が高く、日本列島では他に例がありません。

刺さっていた石鎌



この人骨の腰椎付近からは、生前に射込まれた磨製石鎌が1点出土しました。当時、争いがあった可能性があります。

広田人のルーツ



広田人は、多彩な貝製装身具(アクセサリー)を数多く身につける独特のファッショントレンドをもっていました。この文化のルーツは謎に包まれています。

珍しい抜歯パターン



出土した人骨の多くは、上顎の側切歯を1本だけ抜くという珍しい抜歯をしていました。広田人は、成人儀礼として、歯を抜く習慣をもっていたと考えられています。

広田人の謎



広田人は、日本列島の他の地域にはみられない独特的の身体的特徴や文化をもった人たちです。彼らがどこからきて、どこへ消えたのか、いまだ謎につまっています。

広田人は低身長



広田人は、平均身長が、男性154.0cm、女性で142.8cmという、著しく低身長の集団でした。(現在の小学校5,6年生の平均身長と同じです。)

「山の字」貝符の謎



この貝符に刻まれた文様が、「山」の文字だとする学説と、文様であるとする学説があります。

どこにすんでいたの?



広田遺跡は、広田人の集団墓地ですが、広田人が生活していた集落の遺跡は、まだみつかってなく、大きな謎とされています。

おもな遺物

オオツタノハ貝輪

オオツタノハ貝でつくられた腕輪。この貝は、種子島に多いことから、地元で採集した貝だと考えられています。

イモガイ玉

イモガイの螺頭部を連珠にしてついた装身具(アクセサリー)です。このイモガイ玉は、南区2号人骨の首のまわりに集中して出土したので、ネックレスとして使われたことがわかりました。

有孔円盤状貝製品

イモガイの螺頭部からつくりられた貝製品。孔が穿たれており、装身具であることがわかります。

竜佩型貝製垂飾

この貝製品は、これまで広田遺跡でしか発見されていない独特の貝製品で、装身具としてつかわれたものです。

太形ツノガイ玉

この太形ツノガイ玉は、南区2号人骨の首のまわりから出土したもので、イモガイ玉のネックレスの中に、組み合わせて使われていました。

マクラガイ玉

このマクラガイ玉は、南区2号人骨の首のまわりから出土したもので、連珠にしてネックレスとして使われたことがわかっています。

ゴホウラ貝輪

ゴホウラ貝でつくられた腕輪。この貝は種子島では採集が難しいため、奄美・沖縄地域と交易をして手にいれたと考えられています。

ヤコウガイ製容器

螺鈿細工の素材として有名なヤコウガイでつくられた容器。この貝も、種子島では採集が困難なため、交易で手に入れたとされています。

上層貝符

上層から出土したこれらは多くは孔が穿たれてなく、再葬された人骨の周りや上に置かれていました。このため、上層タイプの貝符のうち、孔のないものは、装身具ではなく、副葬品であると考えられています。

下層貝符

イモガイを板状に削り、浮き彫りで独特の文様をしたもので、貝製の護符のように見えるので、貝符と呼ばれています。下層貝符には孔が穿たれているため、ペンダントのような装身具として使われたことがわかります。

ガラス小玉

このガラス玉は、1~2歳ほどの乳幼児の首のまわりから出土しました。

中津野式壺と在地の甕

これらの土器は、北区2号墓の覆石の上に供えられていた、3世紀頃のものです。壺は、中津野式とよばれる南九州本土の土器型式のもので、甕は、種子島独自の土器型式のものでした。



広田遺跡について、詳しいことは南種子町教育委員会におたずねください。

また、広田遺跡についてのホームページも開設いたしております。

南種子町教育委員会社会教育課 TEL 0997-26-1111
URL:<http://www14.synapse.ne.jp/minamita/hirotaiseki/>

